

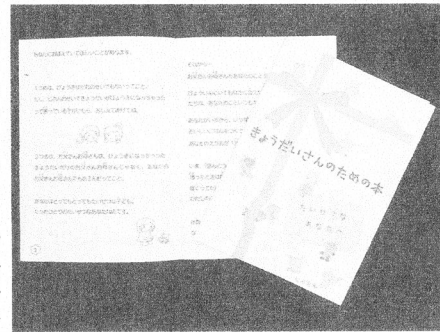
忘年会でカモ鍋を囲む大越さん(右)と住民ら。カモ鍋の仕掛けなど、食材にまつる会話で盛り上がった(東京都内で)

暮らし 家庭

病気のきょうだい世話する親…

きょうだいが長期入院したり、自宅で治療を続けていたりして親にかまってもらえず、孤立感を感じている子らを支援する大阪府内のボランティアグループ「しづたね」が、小冊子「きょうだいさんのための本」＝写真＝を作成した。寂しい思いを親に伝える方法などを紹介し、「両親はじめ、多くの人から愛情を注がれている」と子どもが気づききっかけに」との願いを込めた。同グループは大阪市立総合医療センターで、小児病棟にいる子と親が面会している間、病院の規則で病室内に入れないきょうだいと一緒に遊ぶ活動を、月に2回行っている。

孤立する子 励ます冊子



小冊子では、オリジナルキヤラクター「つぶたね」が、「あなたに会えない時も、お父さんお母さんたちは、あなたのこといつもだいすきなんだよ」と語りかける。また、病気のきょうだいや親への気遣いから本心を口にできずにいる子には、「ねみ

しい時には、サインでつたえられてどうだろう」と提案。父や母に、自分が生まれた時の気持ちをつづってもらって「ページも設けた。」

病気の子の世話で、きょうだいに十分に目を向けられないことに罪悪感を覚える親は多い。代表の清田悠代さんは、スキンシップやちょっとした遊びを一緒にするだけで子どもは驚くほど元気になると勧め、「親子で読み、お互いが相手を元気にできる存在であることを確認し合うのもいいですね」と話している。

A5判、24頁。4000部印刷。病気の子とそのきょうだいがいる家庭に無料配布する。問い合わせはしづたねにメール (sbt0311 - sassi muryo@yahoo.co.jp)。